

チャンス・チャレンジ・チェンジ



秋田県立支援学校天王みどり学園 加賀谷 勝

障害理解授業を受けた子どもたちの感想

1年生から6年生まで、学年ごとに「障害理解授業」を実施した男鹿市立美里小学校の子どもたちから感想文が届きましたので紹介します。

1年生 内容～天王みどり学園の紹介 みんなで協力する体験活動（あいこでジャンケン・フラフープリレー）

- ・フラフープリレーが難しかったけれど、できてよかった。
- ・あいこでジャンケンで、1回だけ合ってたよかった。
- ・車いすの人はたいへんだと思った。

2年生 内容～「誰のための工夫クイズ」と点字や点字ブロック、補聴器や手話、車いすなどに触れる体験

- ・目のふじゆうな人や耳がふじゆうな人やくるまいすの人のためにくふうしている道具があってすごかったです。もしわたしが目のふじゆうな人だったらあんしんしてできると思いました。さいごにだいじなことを二つおねがいされました。一つ目は、だれかがこまっているときに気づく大きい目をもつことと、「だいじょうぶ」とこえをかけるやさしい口をもつことです。
- ・きょうわかったことはほちょうきです。どうしてかというと耳がふじゆうな人にとって、声が大きく聞こえるからべりだとおもいます。大きい目とやさしい口でだれかをたすけたいです。



3年生 内容～聴覚障害に関する学習（聞こえ方の仕組み、補聴器体験、聞こえづらさの体験）

- ・一番すごかったのは、ほちょうきの体けんです。すごくもやもやして聞こえました。とてもうるさくて、一人一人がなにを言っているのか分かりませんでした。ちょうかくしえん学校の先生から、聞こえにくい人と話すときの4つのやくそくをおしえてもらいました。
- ・人工内耳やほちょうきをつけているときは、もやもやした声しか聞こえないことをはじめて知りました。耳せんをしているときは、耳がふ自由な人の気持ちがかくわしくわかりました。今回は音が聞こえない人のことをたくさん知ることができました。このけいけんを生かしたいと思います。
- ・ほちょうきや人工内耳をしている人がいたら、しずかにしたり、話すときは少し大きめの声ではっきり話すことを知りました。また、車にちょうのマークがついていたら耳のふじゆうな人が運てんしていることだと知りました。



4年生 内容～視覚障害に関する学習（見え方の仕組み、見えない体験、アイマスク体験）

- ・目が見えない、見えにくいと、とても不便だと思いました。なぜかという、周りが見えなくてあぶないと思うからです。ですが、点字ブロックや白じょうがあると、役立つので目が見えない人には、かかせないと思います。その他にも、街の中には、信号が青になると音が出るのがあります。もし、ぼくが街の中で目が見えない、見えにくい人を見かけたら声をかけて、道を案内したいと思います。
- ・目が見えない、音が聞こえないなど、不自由な人のことをあらためてわかりました。心のこったことは、不自由でも何でもできなくなるわけじゃないという言葉になっとくいきました。私は、最初目が見えなくなったらどうしようもないと思っていましたが、それはちがうのです。いい発見でした。点字ブロックや白じょう、横だん歩道になっている音は、目が見えない人にかかせないことを知って、たいへんだなと思いました。もし道が分からなくなってしまったら、はずかしがらずに、「こっちです。」と教えることが大事です。見

つけたら、進んで声をかけたいです。アイマスクをつけると、不安になりました。私たちはすぐはずせるけど、不自由な人ははずせないから不安が一生つづきます。だから、私たちみたいにくくではないのです。苦しいとは思いますが、えがおになってほしいです。

5年生 内容～車いす体験 支援についてのグループ学習

- 車いすに乗る人の気持ちを考えることができました。自分のペースで押すのではなく、乗っている人が安心して乗れるようにすることと、声をかけてあげることが大切だと思いました。また、車いすを押して段差を上がる時には、車いすの後ろにあるティッピングレバーに足をかけることが分かりました。足をかけることで、小さい力でも段差を上げられました。これからは、困っている人がいたら自分から進んでお手伝いしようと思いました。その時は笑顔で声をかけてあげることが心がけたいと思います。
- わたしは、これまで車いすに乗ったことはありませんが、車いすに乗っている人を手伝ったことがあります。病院で、ボタンを押すときにわたしが押してあげたら、「ありがとう。」とお礼を言われました。とてもいい気持ちになりました。授業では、車いすを使ってペアで体験しました。車いすを押すのは、思ったよりも重く、むずかしかったです。段差をこえるときや、ターンするのもむずかしかったです。これからは、困っている人には進んで声をかけて、「自分から」進んで手伝うという気持ちを大切にしたいと思いました。



6年生 内容～発達障害の特性と疑似体験 演習「もしもこんな友達がいたらどうする？」

- 私は今まで書くことが苦手、話すことが苦手な人についてくわしく知りませんでした。私がようち園児だったころ一つのクラスにしゃべることが苦手な先生といっしょにいる女の子がいました。小さかった私は「少し変わった子だな」としか思いませんでした。でも今日の出前授業を受けて困り感のある人への考え方が変わりました。「変わった子」なのではなく、「少し話すことが苦手な子」なのだと思います。今思うとあの子に、「き（気づく）・こ（声をかける）・う（動く）」をしてあげられなかった自分がはずかしく感じます。私は困り感のある人ない人にかかわらず誰にでも優しく、気づかいながら接することができるようになりたいと思います。
- 私のお母さんはかんご師で、かいごしせつで働いています。そこに一人の方は、言葉がしゃべれませんが、ジェスチャーで気持ちを伝えることができました。私はそのことを聞いて、「ふーん」と思いましたが、今日の授業でその人も自分の気持ちを伝えるのに必死なんだと改めて感じました。私も将来、そういう方々と関わったとき、苦手なところをしっかりと受け止め、「き・こ・う」を目標にして最後までやりとげたいです。
- 画面に服を着ている男の子がうつっていました。みどり学園では、「子どもができることは手助けをしない。」と言っていました。しょうがいのある人でも自分のことは自分でやるということがわかりました。



子どもたちの感想には、驚き・感動・疑問・共感・発見・決意が記されていました。障害理解授業をきっかけに、自己・他者理解、多様性尊重が促されていくことを期待しています。

なぜ子どもたちが変わったか？

- 一年前と比べて見違えるほど変わった学級がありました。担任を見ていると、穏やかなで表情が豊かである、声のトーンが低く抑えられている、ほめる回数が多い、子どもの発言を頷きながら聴いている等に気付きました。さらに、子どもたちの自学ノートを見て謎が解けました。一人一人の子どもに温かいメッセージがびっしり書かれていました。大好きな先生にいつも認められているという安心感が、子どもたちを変え、互いを認め合う学級になったのです。子どもは「ほめられたい」「認められたい」「役に立ちたい」という3つのタイを望んでいます。「ほめる・認める」が十分満たされると、「役に立ちたい」気持ちが育ちます。子どもたちにたくさんのタイを送りましょう！

